

# 第一回地域研究コンソーシアム賞 受賞者発表

地域研究コンソーシアム事務局

地域研究に携わる国内の九〇以上の組織が集まる地域研究コンソーシアム（JCS）は、二〇〇四年に設立され、京都大学地域研究統合情報センターに事務局を置く組織体です。国家や地域を横断する学際的な地域研究を推進するとともに、その基盤としての地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制を構築し、これによって人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合する新たな知の営みとしての地域研究のさらなる進展を図るために活動しています。

地域研究コンソーシアムでは、上記の目標を達成する上で大きな貢献のあった研究業績、共同研究企画、社会連携活動を広く顕彰するため、二〇一一年度より地域研究コンソーシアム賞（JCS賞）を設置しています。研究業績を対象とする「研究作品賞」、若手研究者の研究業績を対象とする「登竜賞」、シンポジウムなどの研究企画を対象とする「研究企画賞」、社会連携活動を対象とする「社会連携賞」の四つの部門によって選考を行い、毎年秋に行われている年次集会で受賞者を発表・顕彰しています。

地域研究コンソーシアムの詳細についてはウェブサイト <http://www.jcas.jp/> を、地域研究コンソーシアム賞については <http://www.jcas.jp/about/awards.html> を参照ください。

## 第一回（二〇一一年度）地域研究コンソーシアム賞 審査結果および講評

二〇一一年度に新たに設けられた地域研究コンソーシアム賞（JCS賞）の授賞作品ならびに授賞活動について、同賞審査委員会の審議結果を発表する。

今回は、研究作品賞、登竜賞、社会連携賞の三部門で審査を行った。各委員の活発な議論と慎重な審議の結果、それぞれの部門について以下の作品あるいは活動を授賞対象として選出した。

- 研究作品賞授賞作品  
堀江典生編著『現代中央アジア・ロシア移民論』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）
- 登竜賞授賞作品  
王柳蘭著『越境を生きる雲南系ムスリム——北タイにおける共生とネットワーク』（昭和堂、二〇一一年）
- 社会連携賞授賞活動  
石井正子氏の「緊急人道支援と地域研究の人材交流支援」活動

受賞された三氏には、委員会を代表して心からの祝意をお伝えしたい。以下は、各賞の授賞理由ならびに授賞作品・活動に対する講評である。

二〇一一年一月五日

地域研究コンソーシアム賞審査委員会

委員長 田中耕司

委員 家田修・片倉もとこ・中村安秀・毛里和子

## 堀江典生編著

## 『現代中央アジア・ロシア移民論』

本書は、「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」の採択プロジェクトで行った国際シンポジウムをもとにまとめられた論文集である。かつてソ連に属し、現在では六つの国家となった中央アジアとロシアにおける移民問題を軸に、この地域の冷戦崩壊後の変貌を描くとともに、安全保障問題など今後の展開が期待される新たな課題を提示している。共同研究の企画、実施にあたってはさまざまな困難があったものと推測されるが、労働移民に密着したアプローチによってロシアが抱える移民問題の重要性と深刻さを浮き彫りにするとともに、ロシアならびに中央アジアの移民問題を包括的に取りあげることによってこの地域の移民問題への関心を喚起することに成功している。地域研究、経済学、人口学、社会学、安全保障学等の専門家と国際機関の実務家からなる国際的共同による新たな地域研究のスタイルを切り拓く好事例として研究作品賞にふさわしい作品との評価をえた。

一 国研究にとどまらず、国境を越える人の移動がもたらす社会・文化の側面に立ち入った多様な分析が試みられており、中央アジアの研究展開に今後の指針を与える挑戦的

## 登竜賞

## 王柳蘭著

## 『越境を生きる雲南系ムスリム』

## ——北タイにおける共生とネットワーク——

本書は、これまで実証的研究が乏しかった中国雲南省と北タイを往来する雲南系ムスリムの移住と定住の歴史をとりあげて、人の移動が生みだす地域変動を広域的な地域空間の再編成として描きだした力作である。雲南系漢人移住史の重層性、雲南系ムスリムによる交易と移住戦略、国民国家形成のもとでのホスト社会への適応、イスラーム・ネットワークと華人ネットワークを通じた新たな活動領域の拡大など、移民としてのアイデンティティを保持しつつホスト社会での共生の道をたどっていった雲南系ムスリム社会を、長期かつ広域にわたるフィールドワークによって詳細に描きだした点が高く評価された。

たとえば徹底した歴史学的手法によるアプローチ、集団・個人に密着した人類学的アプローチ、あるいは境界をめぐる国家と移民という視角からの政治学的アプローチなど、ひとつのディシプリン研究としても本書で取りあげたようなテーマに迫ることが可能であろう。しかし、あえてその方法をとらずに、諸学の跨境を試みることによって学際的な作品として地域とそこに暮らす人びとを立体的に描

な作品として評価する意見が多くあった。その一方で、作品の完成度に関するいくつかの指摘があったことにもふれておきたい。本書の執筆にはロシア、カザフスタン、韓国などの外国人研究者が多数参加しており、その翻訳者も多数にのぼる。編者はそのことに起因する編集上の苦勞と工夫を披瀝しているが、なお翻訳の妥当性を指摘する意見があった。また、これに関連して、日本語ではなく現地語（ロシア語）で是非出版すべきという意見も出された。付録として採録されたモスクワ在住の中央アジア移民の証言について、個人情報への配慮などが必要ではないかとの指摘、あるいは本書全体をとりまとめる「最後の一章」がほかあったという意見など、本書の構成にかかわる指摘があったこともこの機会に紹介しておきたい。

以上のような指摘があったものの、挑戦的で意欲的な研究企画と国際的な研究実践により生み出された地域研究の優れた作品としての価値を揺るがせるものではなく、研究作品賞を授与するに相応しい作品である。

きだすのに成功したことは本書の大きな魅力であった。

登竜賞の第二次審査の過程で最終的な絞り込みの対象となったものの候補作品も、著者たちが長期のフィールドワークを通じて築いていった、人々との深い信頼関係を基礎にまとめられた作品であった。そして、著者らの専門分野に深く根ざした洞察と考察を含むものでもあった。いずれも甲乙つけがたいでき映えであったが、本書を最終的に授賞候補とした大きなポイントは、この作品からうかがえる、多元的かつ複層的なさまざまな「境界」を往還しようとする挑戦が登竜賞を授与するにふさわしいとの意見が多くを占めたからである。本書は北タイおよび雲南省でのフィールドワークによって得られた成果であるが、雲南系ムスリムがつくる地域空間のダイナミズムを明らかにするために、ミャンマーのシャン州やラオス北部での調査も必要となろう。今後は、こうした隣接地域でも調査が進むことを期待したい。また、「ミクロ・リージョン」という概念の精緻化を含め、本書で掲げられた今後に残された課題に果敢に挑戦することによって、本賞の授与という期待にこたえていってほしい。

## 石井正子氏の「緊急人道支援と地域研究の人材交流支援」活動に対して

地域研究コンソーシアムでは、設立当初から地域研究者あるいは地域研究組織の社会連携活動を支援することが、その活動の重要な柱となっている。こうした活動をいっそう強化し、その重要性を研究者コミュニティにもさらに理解していただくという趣旨で本賞が設置された。

本賞への応募件数はコンソーシアム部会長の報告のとおり石井正子氏の活動に関する一件のみであったが、審査委員会は推薦内容および石井氏の活動実績にもとづいて本賞の授与に相応しい活動として授賞対象とすることとした。

石井正子氏は、大規模自然災害の被災地や地域紛争地域に対する緊急支援や復興支援など、国際支援への地域研究者・組織の協力・連携の必要性を早くから唱えており、また、実際に地域研究者として人道支援団体の活動に参加し、研究と実務を結び活動を積極的に行ってきた。とくにジャパン・プラットフォームと地域研究コンソーシアムのあいだの協力関係の確立は石井氏の働きによって実現したもので、スマトラ島沖地震・津波被害の初動調査、スーダン南部での人道支援など、二〇〇七年以来、これまで六件七名の人材交流支援を実現するという実績をあげている。

この交流支援を通じて海外での災害発生時における人道支援団体と地域研究者との協力関係のひとつのあり方を示した点が高く評価された。現に、この成果は、ジャパン・プラットフォームが地域研究コンソーシアムを通じて支援事業に対する地域研究者の協力を求めるようになったことにも現れており、研究者コミュニティと実務に従事する諸団体との双方を繋ぐ基礎を作ったことの意義は大きい。

また、石井氏の仲介によって地域研究者と人道支援の実務者が出会い、その後も継続的に合同の研究会を開催したり学会パネルを企画したりするなどの協力・連携関係の広がりが見られる。これらの研究会や集会を通じて、自然災害や地域紛争の影響を受けた地域への支援や復興への関与が新たな地域理解のアプローチとなりうることも地域研究者のあいだで認識されるようになっており、地域研究における新領域を拓くパイオニアとしても本賞を授与するに相応しいとの意見が多く出された。なお、本賞の授賞対象として推薦された活動は、石井氏個人の活動としてではなく地域研究コンソーシアム社会連携部会の活動として実施されたものも含まれるが、本賞によって顕彰すべき個人や団体が今後たくさん輩出することを期待して、部会活動の先導役となった石井氏を顕彰することとした。

## 受賞者紹介

### 研究作品賞



堀江典生  
(ほりえ・のりお)

京都市生まれ。東北大学東北アジア研究センター、富山大学経済学部を経て、二〇〇一年富山大学極東地域研究センター設立に伴い同センターに勤務。現在、同センター教授。ロシアを中心に労働市場研究、中ロ国境地域経済交流、中央アジアからの外国人労働者の諸問題に関する研究を行っている。著書に、受賞作のほか、共編著『中ロ経済論——国境地域から見る北東アジアの新展開』(ミネルヴァ書房、二〇一〇年)などがある。

### 登壇賞



王柳蘭  
(おう・りゅうらん/Wang Lidian)

京都大学地域研究統合情報センター・日本学術振興会特別研究員RPD。神戸市生まれ。一九九四年神戸女学院大学文学部英文学科卒業。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程退学。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教をへて二〇〇九年四月から現職。人間・環境学博士(京都大学)。専門分野は中国・東南アジア地域の回民(ムスリム)・漢人をめぐる越境とコミュニティの生成・宗教実践と文化の継承に関する人類学、地域研究。

### 社会連携賞



石井正子  
(いしい・まさこ)

大阪大学大学院人間科学研究科准教授。専門は東南アジア研究。二〇〇九年四月よりジャパン・プラットフォーム(JPF)の常任委員をつとめる。二〇〇四年から二〇一〇年まで地域研究コンソーシアム(JCAS)社会連携研究会および部会のメンバーをつとめ、緊急人道支援を行う国際協力団体に地域研究者を紹介する活動などを行った。現在、JPFの常任委員をつとめながら、人道支援と地域研究をどのように制度的につなげることができるか模索している。

## 堀江典生 編著

## 『現代中央アジア・ロシア移民論』

(ミネルヴァ書房、二〇一〇年)

大津定美 (神戸大学名誉教授)

ソ連社会主義が崩壊して二〇年、かつてソ連領であった中央アジア諸国での経済と社会はどうなっているであろうか。それを労働移動と移民という問題を軸に検証しようというのが本書の狙いである。同趣旨の問題意識で、中・東欧地域や中国・極東ロシアにおける状況を追求した類書がすでにいくつもあるが(文末リスト参照)、中央アジア地域に関するわが国での包括的な研究書としては、本書が鎬矢である。

本書は、文科省科研費の補助を受け実施された調査とそれをもとに開催された大規模な国際シンポでの報告論文がもとになっている。執筆者の国籍は、ロシア、カザフスタン、韓国、日本の四か国となっているが、移民研究者の常として、絶えず現地調査に歩き廻っているコスモポリタン

が多いから、筆者の国籍をあまり重視する必要はないかもしれない。

## I

本書の編別・省別構成は以下のとおりである(執筆者名は省略)。

## 第I部 中央アジア・ロシア移民問題の領域

## 第一章 中央アジア地域の人的資源と社会状況

## 第二章 労働移民がたぐロシアと中央アジア

## 第三章 中央アジアにおける人身売買との戦い

## 第四章 C I S諸国の移民問題へのILOの取り組み

第I部は、研究対象についてのいわば総論で、第一章は、中央アジア地域の経済・社会状況の人口論視角からの概論、とくに人的資源のストックに重きをおいて概観する。第二章は、旧ソ連時代からの長い歴史をもつ中央アジア・ロシアの移民の歴史的・今日の問題状況を一瞥するもので、第三章は、「人身売買」という特定の、とはいえきわめて先鋭な問題領域からの問題提起、第四章はILO(国際労働機関)がC I Sの労働移動問題をどのように捉えているかの概観を示している。

## 第II部 中央アジアからロシアへの移民

## 第五章 シベリアへ向う中央アジア移民

## 第六章 カザフスタンを経由する移民たち

## 第七章 モスクワの中央アジア移民

## 第III部 中央アジアからカザフスタンへの移民

## 第八章 カザフスタン移民政策の基本コンセプト

## 第九章 カザフスタンへの移民

## 第一〇章 カザフスタンにおける移民定着の諸問題

## 第十一章 カザフスタンにおける移民の変容

第II部と第III部は、中央アジアからロシアへ、そして中央アジアからカザフスタンへという、二つの大きな流れを区別して取り扱う。中央アジアとロシアの移民というと、従来は送り出し先と受け入れ先と二分して、しかし流れは一方向で捉えられてきた。しかし、経済成長軌道に乗り始めたカザフスタンは、二〇〇二年から「受入国」に転換した。この流れの変化を大きく捉えようとする点でも、本書は新しいアプローチを試みているといえる。カザフ移民研究としては、日本ではごく少数の論文があるだけだ。本書の表題に「中央アジア」とあるが、カザフスタンの比重は圧倒的に大きく、あえてワンセクションを設定している。

## 第IV部 市民・移民・地域の安全保障

## 第十二章 中央アジア、ロシアにおける移民と「人間

## 社会の安全保障」

## 第十三章 中央アジアのシテイズンシップと安全保障

## 第十四章 シベリア・極東地域におけるステレオタイプと移民恐怖症

## Pと移民恐怖症

## 第十五章 ロシアにおける超エスノフォビア

## 第十六章 カザフスタンにおける人身売買のリスク

第IV部は、これまでの諸章が人流・フローの側面を重視した分析となっていたとすれば、ここではいわば人流が引き起こす「ストックの課題」で、「人間の安全保障」、「エスノフォビア」や「人身売買」など社会的課題とそれへの対応など、これまでわが国ではあまり紹介されてこなかった問題だ。それを中央アジアという地域での特殊性を考慮に入れた視角から迫るといふ、きわめてユニークな課題設定とみることができる。

さらに、付録・付属資料「モスクワに住む中央アジア移民たちの証言」は、モスクワで暮らす移民労働者・非合法滞在者も含めて、計二〇人へのインタビューの実録で、第IV部までのマクロな分析とは異なって、徹底的に個人に密着したライフヒストリー、移民労働者としての生活と仕事、モスクワという特殊な社会で家族から離れて一人で暮らす人々のミクロの実像に迫ろうという試みである。街頭で掃除人として働いている人に話しかけ、ましてや暮らしか所得についてあれこれ聞き出すのは、普通の日本人には至難の業だ。こうした調査は、まさに国際的な研究協力なしには不可能で、本書のいまひとつの大きな特色となっている。

本書の各章の内容は、編者による「はじめに」で簡にして要をえた紹介がなされているので、それをご覧いただくのが最適である。

以上のように、本書は、実に大きなテーマに多面的かつ包括的に迫ろうとしているので、全体を咀嚼し成果を簡潔に纏めるのは容易ではない。ここでは二、三のテーマに絞って、若干のコメントを試みよう。

## II

世界的に見て、移民研究はすでに長い歴史を持っているが、ソ連崩壊でグローバルゼーションが加速され、資本や情報だけでなく国境を越えた人・労働力の流れも近年ますます活発になってきている。この流れをどういう学問ディシプリンから捉えるのか。経済学、法学、社会学などさまざまなアプローチがありうるが、従来の学問研究は暗黙の裡に「二国システム」を前提としており、国際移民のようにいわば境界を超えた、境界のないフローを対象とする研究には、単一の研究方法論はなお存在しないといえよう。

ロシアの場合で見ると、国際労働力移動・移民研究は幅が広く、かつソ連時代から見ても長い歴史を持つ。ソ連崩壊以後には、旧共和国が独立し新たな国境ができたことにより、旧来の国内移動が国際移動となり、一挙に問題が複

果も多数刊行されている（とはいえ、この地域で国境を接した中国にはまだそうした移民研究グループは見られない。このテーマはなお「禁じられた」分野に近いようだ）。

評者は（私事となるが）、主に第二のグループとこの一〇年以上研究交流を重ねてきたし、二〇〇二年にはジャンナ・アントノヴナさん（本書第二章筆者）や中国の移民研究の第一人者ゲリブラス教授を京都にお招きして国際シンポジウムをもった（成果は文献①）。また、FMC主宰のシンポジウムに参加（モスクワ二〇〇一、二〇〇六だけでなく、サンクトペテルブルク二〇〇四、キシニョフ二〇〇五、スーズダリ二〇〇六など）、各地で多くの研究者の知己をえたが、共同調査といえるものを実施したことはなかった。

本書の編者は、第三のグループに属する一人、ロシア社会政策研究所のセルゲイ・リヤザンツェフ教授との緊密な研究協力体制を樹立、モスクワ（だけでなく地方にも）や中央アジアでの現地調査を実施し、シンポジウムを企画、本書にまとめられた。ロシアやカザフスタンとのみごとな研究協力の成果といえよう。

## III

本書の特色のひとつは、中央アジアでの移民問題が内包

雑化した。そこで、実に多くの研究機関や個人の研究者が関わってきた。その意味では、国際労働力移動研究は最近の社会科学分野での一大人気テーマとなった感がある。それを担う研究者の層も実に厚く、本来の狭いディシプリンをかなぐり捨てて未知の広野に飛び出した形の「新参者」も多いともいえよう。現在のモスクワに限っても、筆者の見たところ、三つのグループが存在する。ひとつは、モスクワ大学人口学研究センターにつながる研究者でイオンツェフ教授を中心にしたグループで、第二は、ロシア科学アカデミー「生産力配置研究所」をベースに新たに形成された「強制移住研究センター」(Forced Migration Center, FMC)につながる研究者で（中心はジャンナ・ザイオンチコフスカヤ女史、本書第二章筆者）、ロシア各地に協力者をもち、IOM（国際移住機構）モスクワ支部も強い協力関係にある。第三が、地方を含めそれ以外のいくつかの大学ないし研究所にまたがる緩い繋がりで、とはいえ上記二つのグループとは明らかに異なる志向を持つ。

三つのグループの性格を強引に特徴づけるとすれば、第一は人口論研究から、第二は経済地理学から、第三はそのほか多面的なアプローチを採用する人達、といえようか。またこれ以外にも、中国や北朝鮮からの労働移民が顕著なロシア極東においても地域特性に注目する移民研究者が少なくないし（ハバロフスクやウラジオストクなど）、研究

する社会問題、人身売買を含む人権問題などに目を向けていることである。とくに第IV部「市民・移民・地域の安全保障」に含まれる諸章、第一章「中央アジア、ロシアにおける移民と『人間社会の安全保障』」、第二章「中央アジアのシベリア・極東地域におけるステレオタイプと移民恐怖症」、第三章「カザフスタンにおける超エスノフォビア」、第一章「カザフスタンにおける人身売買のリスク」がそうであり、また第三章「中央アジアにおける人身売買との戦い」もそうである。もっとも、Human Trafficking は国際移民問題ではどこでも一大研究テーマであったが、中央アジア研究では、少なくともこれまでわが国ではあまり紹介・注目されてこなかった問題でもある。

それとの関連で第三章と第一章の二つの章の筆者、カザフスタンのエカテリーナ・バディコヴァ女史のコントリビューションについてひとこと触れておこう。彼女は「中央アジア人身売買撲滅NGO協会」の代表で、被害者救済の運動を担う研究者である。中央アジア諸国が長く封建的な身分制や女性差別の慣行でならされてきたことが奴隷的な労働や搾取を温存させてきた背景にあり、社会主義から市場経済への転換とその混乱のなかで女性の売春や人身売買を横行させてきたこと、彼らを保護すべき法的システムや社会意識の遅れを強く指摘している。もっともこれは経

済の後進性のためばかりでなく、東南アジアやカリブ海周辺、ヨーロッパでのロシア女性の強制売春など、どこでも広く見られる問題だといえる。

また、バディコヴァ女史によると、今のところ救済のための活動資金は海外からの支援に頼っているのが現状であり、最近の国際金融危機で支援規模が縮小しつつあるようだ。とはいえ、カザフスタンが他の中央アジア諸国とは異なっており、第Ⅲ部の諸章の分析に見られるように、経済成長を背景にして移民排出国から受入国に転換したという状況のなかで、今後は被害者救済や国民の意思改革面でのいっそうの努力が望まれる。

#### IV

ロシア・中央アジアの労働移民の特殊性を評価するために、他の地域のそれと対比してみることに、とくに東アジア、東南アジアとの比較が重要ではないかと思われる。本書の対象からは若干外れるが、ベトナムとロシアとの関係も無視できない。ベトナムは、旧ソ連時代の「盟友」で、青年の教育・人材育成に協力してきただけでなく、ロシアで企業を立ち上げ、そこに大量のベトナム人を雇用してきたという経緯があり、その人流通でのパイプとネットワークは今日も強固だ。二〇〇七年には、ロシアとベトナムの

かろうが、これがロシアで出版されるということも、本書の重要性を示す今ひとつの証左であろう。

#### ●参考文献

- ① 大津定美編著(二〇〇五)『北東アジアにおける国際労働移動と地域経済開発』ミネルヴァ書房。
- ② 平泉秀樹編著(二〇〇六)『東北アジア地域における経済の構造変化と人口変動』アジア経済研究所、明石書店。
- ③ 赤羽恒雄、マンナ・ワシリエヴァ共編著(二〇〇六)『北東アジアにおける人口移動』国連大学出版。
- ④ Моделирование потоков трудовой миграции из стран центральной Азии в Россию, Сурьязанцев, Н. Хорие, Москва. 2011, с. 191.
- ⑤ Nancy Foner et al. Eds., Immigration Research for a new Century, Multidisciplinary Perspectives, Russel Sage Foundation, NY, 2000.
- ⑥ Craig A. Parsons and Timothy M. Smeeding Eds.: Immigration and the Transformation of Europe, Cambridge U.P. 2006, pp.480.

労働移民問題に限定した大きなシンポジウムがモスクワで開かれたほどだ。リヤザンツェフ教授のリーダーシップで可能となったこのシンポジウムに出席してその強さに驚いた。またごく最近では、ミャンマーの軍事政権との間に密かに進められてきた軍事・エネルギー関係の政府間協力をもとに軍人や技術者の人材育成にもロシアは熱心で、多くの関係者が「ベトナム・ロシア」的交流を行っている。もつとも、ここまで来ると、単なる二国間・地域間関係の枠を超えて、もろに「国際政治の力学」が作用している領域となる。また、今後の政治状況とも関わるが、プーチン政権による旧ソ連復活、「ロシア帝国」再建の野望を見らうと、こうした国際人流・労働力移動が果たす役割にも注目しておかねばならない。

最後に、本書の「ロシア語版・姉妹篇」が出版されたことにも触れておきたい。『中央アジア諸国からロシアへの労働移民——フロアのモデル化』(モスクワ、二〇一一、文献④)がそれで、セルゲイ・リヤザンツェフ氏と堀江典生氏の共著で、構成は全一〇章、そのうち第七章と最終の第一〇章(分量にすると両者で七割弱)が本書と同一だ。他の章は、タイトルは似ていても内容は異なり、中央アジアからの移民問題への政策提言(第九章)などもあり、研究成機関への配慮(?)もうかがわせる。というわけで、ロシアの読者向けに出された本書の姉妹篇といってよ

王柳蘭 著

## 『越境を生きる雲南系ムスリム』

——北タイにおける共生とネットワーク——

(昭和堂、二〇一二年)

土佐桂子 (東京外国語大学大学院)

本書は、雲南からタイに移住した雲南系ムスリムに着目し、長いタイムスパンのなかで雲南系漢人を含めた移住を再構成し、彼らが他者と共生を図る姿を描く力作である。本書については、タイ、ミャンマーの回族研究に詳しく、最もふさわしい評者である吉松久美子氏の書評が『東南アジア——歴史と文化』第四〇号(二〇一二年)に掲載予定である。タイ、移民、ムスリム研究のいずれにも明るくない評者では力不足のそしりを免れないが、可能な範囲で評すことにしたい。

まず本書の要約を行う。第一章で研究の目的に続いて、本書で扱う雲南系ムスリムに関わる用語の定義を示し、先行研究における方法論的位置づけを示す。エスニシティ研究は国民国家内部の民族動態に議論が収斂しがちであり、

では雲南系漢人と雲南系ムスリムがエスニシティに基づき分化するプロセスを示し、とくに後者がイスラーム・ネットワークをいかに使うかに焦点を当てる。中東諸国からの援助も得てモスクや学校建設を行い、結果的に宗教儀礼の共同化が生じ、それがマッカ巡礼や故郷訪問の下地を作っている。第七章では、華人社会とのネットワーク形成を示している。「避難村」の住人などを中心に、台湾とのつながりが軍事支援から人道支援に移りつつも強化される一方で、非漢人を中心に中国側の働きかけもあって、再ネットワーク化が図られる。終章で結論が述べられている。

本書の意義は数多くあるが、とくに評者は以下の三点に注目した。第一に、王氏はあくまで研究対象から手法と理論を模索し、結果的に手法の独自性を獲得している点である。人類学において、フィールド調査の捉えなおしが近年試みられているとはいえ、マリノフスキー以来、一か所に長期滞在して行う共同体調査を最も得意としてきた。それに対して、本書の対象は越境を特徴とする人々である。人類学的アプローチからいえば、後半の集住地域を核に、住民の語りから移住史を再構成し、集住状況を描くという選択肢もあつただろう。しかし、王氏は雲南系移民をその出発点からとらえようとし、その結果、歴史的ダイナミズムを踏まえた移動の再構成に成功した。本来序論に書きそえる人間味あふれた研究対象との出会いが敢えて第二章で書

また、近年増加しつつあるトランスナショナリズム、ディアスポラ研究においては共時的ネットワーク論に重点がおかれ、集団の生成への着目が少なく、歴史的視点を含め越境を扱う必要がある。タイ華人研究内では、海路華人に対して陸路華人を、南タイ中心のムスリム⇨移民研究に対して北タイの雲南系ムスリムを扱う点が稀少である。第二章では、タイにおける雲南系華人集落の分布を示し、雲南からの移住を三期に区分する。第一波は一九世紀後半から二〇世紀前半の雲南系ムスリムの交易を中心とした移動、第二波は一九四〇年代半ばから五〇年前後にかけて、中華共産党政権成立による不安や国民党軍の敗走に従って形成された難民村のはじまり、第三波は一九六〇年代以降国民党軍の定着以後の動きで、ビルマ系反政府軍のタイ越境や反共ゲリラ政策に基づいた戦略村の形成なども含まれる。これらを背景として、続く第二章で個々の移動の歴史を示す。

第三章では雲南系漢人の越境経験とネットワークの形成を示し、第四章では雲南系ムスリムを主にして、チェンマイ市やメーサリアン市に集住する事例を紹介している。第五章ではタイ国家による雲南人の法的位置づけを示す。多様な文化的宗教的要素を捨象し、移住時期と経緯により「元国民党軍系兵士」「国民党軍系ホー避難民」「非国民党軍系ホー」に分類し、反共産主義にとつての国益という観点から、上記の順に優先的にタイ国籍を与えていった。第六章

かれていることも興味深い。タイ人、雲南人、さらに雲南漢人のあいだで、可視化しにくい存在であるからこそ、雲南系ムスリムの現時点の集住分布を数量的に示す。これは、民族植物学研究から始まった息の長い調査と「文理融合」的素地抜きには成し遂げられない、優れて貴重な成果である。

第二に、点から線へ、線が交錯して面をなすにいたる移住の記述の丹念さである。政治経済的な状況による影響や個人的ないし家族内の事情、さらにはアヘン交易をはじめとする敢えて「語られない」裏の状況にも十分目配りしつつ、越境の経験が丹念に描かれていく。ここから移住の背景にある政治経済的状况が読み込まれると同時に、過去の一時点での複数の選択肢、ないし個人目線による地域、空間認識までも浮かび上がり、前者の数量的・空間的明示と対をなし、「移動」経験をまさに生きたものとして提示しえた。

第三に、著者は「雲南系ムスリム」を主な調査対象としつつ、「くくり」を語る難しさに自覚的である。例えば国民党軍徴用の馬幫資料(八四―八六頁)に典型だが、当事者の「出身」はともかく「宗教」が見えにくい。さらには、雲南人、ムスリム、漢人、国民党軍、ホーなど、「くくり」やその意味が状況により変化するばかりか、くぐられる内実すら異なるなかで、「雲南系ムスリム」を追うこ

とも覚悟が必要だったに違いない。彼らは交易を通じて、あるいは移動を余儀なくされる厳しい状況下で、名付けと名乗りの絶え間ない相互プロセスを生き抜いた人々であり、エスニシティの観点からすれば、まさに「フレキシブル」である。しかし、読者も気を引き締めて追わねば振り落とされるほど複雑に入り組んだ記述の読後には、アイワ・オンのような、後期資本主義社会を背景に複数のアイデンティティを使い分けるといふ華人研究が逆に単調に感じられる (Ong 1999)。もちろんオンの書籍は現代における共時現象を主に扱い、スタンスも異なる。ナショナルな範囲を超えたアイデンティティの共有については、映画、ドラマといったメディアによる公共圏という概念を援用するが、対照的に王氏はトランスナショナルなネットワーク化についても徹底して実証主義を貫き、アイデンティティ論はかなり注意して扱っている。

評者はこの禁欲さと実証主義に心から敬意を表するものである。とはいえ、本書の成果を前提として、今後、エスニシティ論におけるすり合わせは多少あってもよいと感じる。例えば、交易者としての移動やそのためのネットワーク作りといった職業的ハビタスが重要だったことも伝わる。雲南系漢人の田氏のように、商売上の店主「老板」のもとで交易に携わる「赶馬人」の仕事をしつつ、ムスリムの店主の人格に惚れてイスラームに改宗したという例も興

味深い (二五二―二五三頁)。こうしたハビタスが宗教実践と結びついていた可能性もあるだろう。一方、「定住」をはじめ、モスクを建てるチェンマイの事例では「雲南系ムスリム」が意識されたエスニシティとして確立しつつある。それでは彼らにとつて「移動」や「交易」、ネットワーク化といった特徴的営為はなんであったのか、あるいはそれらは定着後にいかに伝えられるのか等、今後さらなる議論が期待できるだろう。

一方、移動の際に個々人の周りには、従来前提とされた「共同体」というよりネットワークであり、資料の制約から考えても個の語りを基に描く手法は適切だと思ふ。しかし、集住地域では一定の共同性を有する「コミュニティ」が存在している。たとえば、バーン・ホー・モスクの集住例でも同一民族・同一宗教間で結婚相手を探すことが好まれ (二二八―二三七頁)、定住後の社会形成の一端がうかがえ、興味深い。ただし、この記述を含め、集住地域でもインフォーマントの語りと王氏のまとめというスタイルが中心となる点は若干気になる。コミュニティ内での人間関係、相反する見解、ないし、王氏の解釈にいたるプロセスが見える情報があと一息加えられてもよかつたかとは思ふ。しかし、これらは本書に導かれさらなる興味として出る、いわば読者の期待である。ひとつのデイシブリン内でもどうしてもアプローチしにくい研究対象というもの

は存在する。王氏がそこに正面から取り組み、見事に学際的な成果を上げたことは間違いない。

#### ●引用文献

Ong, Aihwa. (1999) *Flexible Citizenship: The Cultural Logics of Transnationality*. Durham & London, Duke University Press.

# 第二回(二〇一二年)地域研究コンソーシアム賞 募集要項

## 趣旨

地域研究コンソーシアムは、その規約において「国家や地域を横断する学際的な地域研究を推進するとともに、その基盤としての地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制を構築することを目的とする。これにより、人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合する新たな知の営みとしての地域研究のさらなる進展を図る」と述べ、それに続いて、一、共同研究の企画・実施・支援、二、海外研究拠点の設置運営と国際的な共同研究・臨地研究の企画・実施、三、研究成果の国内外への発信・出版、四、地域研究情報の相互活用・共有化と公開という具体的目標を掲げている。

地域研究コンソーシアム賞は、上記の目標を達成する上で大きな貢献のあった研究業績、共同研究企画、そして社会連携活動を広く顕彰することを目的として授与される。

## 顕彰部門

- 一、地域研究コンソーシアム研究作品賞……個人ないし共同による学術研究業績で、賞の趣旨に合致する公刊論文ないし図書作品を対象とする。
- 二、地域研究コンソーシアム登竜賞……大学院生及び最終学歴修了後一〇年程度以内を目安とする研究者による学

術研究業績で、賞の趣旨に合致する公刊論文ないし図書の作品を対象とする。

- 三、地域研究コンソーシアム研究企画賞……共同研究企画で、賞の趣旨に合致し、今後の地域研究の動向に対して大きなインパクトを与えたシンポジウムの開催や研究プロジェクトの遂行などの企画を対象とする。
- 四、地域研究コンソーシアム社会連携賞……学術研究以外の分野で賞の趣旨に合致する活動実績を対象とする。

## 推薦

地域研究コンソーシアム賞は自薦ないし他薦をもとに選考される。

推薦者は個人に限る。また、推薦書の記載は日本語に限る。推薦者は複数の作品、企画、活動を推薦できるが、同一の作品、企画、活動を複数の部門に重複して推薦することはできない。また、一人の個人または一つの組織について推薦できるのは原則として一つの作品、企画、活動とする。推薦書の様式はとくに定めがないが、以下の各項目を記入すること。

- ①推薦者の氏名、所属・職名、主な経歴・研究活動業績
- ②推薦部門(研究作品賞・登竜賞・研究企画賞・社会連携賞のいずれか)

- ③推薦対象の作品・企画・活動の概要……作品の場合は書誌情報と概要、企画の場合は企画の名称と概要、活動の場合は活動の名称と概要。いずれも一〇〇〇字以内(図表等を入る場合、図表等は一〇〇〇字に含めない)。研究作品賞と登竜賞で推薦対象が論文である場合は写しを一部添えること。研究企画賞と社会連携賞への応募では、企画や活動に係わる資料を添付してよい。
- ④推薦理由……一〇〇〇字以内。地域研究コンソーシアム賞の顕彰目的を踏まえた推薦理由。
- ⑤推薦対象と推薦者の関係……他薦の場合は推薦者と推薦対象(者)との関係を明記(とくに、推薦対象の著者ないし代表者と推薦者が親族関係ないし師弟関係にある場合は、その関係の明記)

各部門の推薦対象は以下の通りとする。

- 一、研究作品賞……前年度(二〇一一年度)及び前々年度(二〇一〇年度)に公刊された論文ないし図書の作品を推薦の対象とする。推薦された作品の中から研究作品賞を授与する。

- 二、登竜賞……大学院生及び最終学歴修了後一〇年程度以内を目安とする研究者によって前年度(二〇一一年度)及び前々年度(二〇一〇年度)に公刊された論文ないし図書の作品を推薦の対象とする(「登竜賞」の選考対象には博士論文も含まれる)。推薦された作品の中から登竜賞を授与する。

- 三、研究企画賞……前年度(二〇一一年度)及び前々年度(二〇一〇年度)に実施された共同研究企画の実績を推薦の対象とする。推薦された企画の中から研究企画賞を授与する。
- 四、社会連携賞……前年度(二〇一一年度)ないしそれ以前から行われてきた研究以外の活動で、地域研究の発展に寄与する実績を推薦の対象とする。推薦された活動実績の中から社会連携賞を授与する。

## 選考

審査委員会は地域研究コンソーシアムの委嘱を受けた五名程度の専門家で構成される。

## 審査委員

家田修、片倉もとこ、田中耕司、中村安秀、毛里和子(敬称略、五十音順)

## 顕彰

- 一、年次集会で授賞式を行い、審査委員会による講評、会長による賞状の授与、受賞者による受賞スピーチを行う。
- 二、『地域研究』誌上で審査講評と受賞対象の概要を掲載する。図書が受賞対象となった場合は書評として掲載することもありうる。
- 三、地域研究コンソーシアム・ホームページに審査講評と受賞対象の概要を掲載する。

## 募集

応募締切……二〇一二年五月七日(必着)